

嶋崎尚子・西城戸誠・長谷山隆博編著

『芦別』

——炭鉱<ヤマ>とマチの社会史』



紹介者：市原 博

本書は、石狩炭田北部の空知炭田に所在した代表的産炭地であった芦別市を対象に、産炭地研究会が精力的に行ってきたオーラルヒストリーや文献調査の成果をまとめたものである。産炭地研究会のサイトの説明によると、同会は、札幌学院大学在籍時の経験から旧産炭地域の地域再生に取り組む決意を固めた中澤秀雄の呼びかけで、常磐炭鉱調査に取り組んできた早稲田大学の嶋崎尚子らのグループの参加も得て2008年に結成された。以後、同会は、石狩・常磐・釧路・宇部・三池・高島という筑豊以外の日本のほぼ全ての主要炭田に関係する研究者、炭鉱・産炭地関係者、学芸員とのネットワークを形成しながら、散逸が懸念される炭鉱資料のアーカイブ化とオーラルヒストリー手法による炭鉱・産炭地の生活史の調査に精力的に取り組み、その成果を冊子や構成員の学術論文として公表してきた。同会の構成員の専攻は社会学を中心に経済史や地理学、さらには産業遺産まで広がっているので、その調査は、学際的に炭鉱と産炭地域の経験を多方面から照射する内容になっている。

同会はこれまでに、釧路炭田の太平洋炭鉱と尺別炭鉱を対象にした調査を公刊し、さらに、調査内容を敷衍化した著作を出版している⁽¹⁾。都市型炭鉱で炭鉱労働者の一般市民化を推進した太平洋炭鉱、炭鉱の開発とともに無人の地に集落が形成され、閉山とともに無人の地に戻った尺別炭鉱とは異なり、山間の地とはいえ既存の集落の隣に炭鉱が開発されて移住者が集まり、閉山とともに人口の流出が進む一方で、「炭鉱町」から一般の「地方都市」へと変貌した芦別市の経験が本書では多角的に描かれている。

まず、市広報課が撮影した1953年から88年までの芦別市の写真が、編者の一人である長谷山隆博・芦別市星の降る里百年記念館元学芸員の解説とともに掲載され、同市の様相の変遷が視覚的に把握できるようになっている。本文は多様なテーマからなる11章と終章で構成される。第1章「石炭と電力のマチ」（島西智輝）では、近代以降の日本の主要なエネルギー供給地となってきた芦別での水力発電所の建設と「芦別五山」と呼ばれた炭鉱（三菱芦別・三井芦別・油谷・芦別高根・明治上芦別炭鉱）の開発から閉山までの動向が、その相互関係も含めて論じられる。第2章「ビルド鉱三井芦別の人員確保と労働者の定着」（嶋崎尚子）は、第一次石炭政策でビルド鉱に指定された三井芦別炭鉱の内部資料を利用して、鉱員の採用と離職動向を分析し、1950年代以降彼らの定着化が進み「炭鉱社会」が形成されたことを確認している。同じく嶋崎が執筆した第3章「ビルド鉱の衰退と閉山」では、三井芦別炭鉱の退職者、特に石炭産業に終焉をもたらした1987年からの第八次石炭政策の下での人員削減と92年の閉山による退職者の動向が分析され、彼らが退職・

(1) 嶋崎尚子・中澤秀雄・島西智輝・石川孝織編『太平洋炭鉱 上・下』2018年、19年、釧路市教育委員会；嶋崎尚子・新藤慶・木村至聖・笠原良太・畑山直子『〈つながり〉の戦後史』2020年、青弓社；中澤秀雄・嶋崎尚子編著『炭鉱と日本の奇跡』2018年、青弓社。

移住後も「ヤマの会」を組織してつながりを維持していることが明らかにされる。第4章「樺太引揚者の足跡から辿る戦後の芦別と石炭産業」(坂田勝彦)は、敗戦直後の樺太引揚者と炭鉱との関わりを取り上げ、芦別に転入した彼らの炭鉱での体験を描いている。第5章「炭鉱の学校と子ども」(笠原良太)では、炭鉱会社の支援で整備された「芦別五山」の学校での子供たちの生活や進路、心情が特に炭鉱の合理化・閉山期を中心に紹介される。第6章「三井芦別炭鉱での仕事」(清水拓)は、急傾斜炭層という特徴に規定された欠口採炭という独特な採炭方式の内容と生産組織・労働組織の在り方、鉱員たちの作業内容を解説している。第7章「災害報告から読む三井芦別炭鉱の事故」(長谷山隆博)では、三井芦別炭業所作成の災害報告や事故記録を利用して作成したデータベースを分析して、事故の傾向と原因、罹災者の状況などを明らかにし、炭鉱労働の危険性を再確認している。第8章「三井芦別労働組合と精妙な賃金体系」(中澤秀雄)では、三井芦別炭鉱の採炭に直接かかわる坑内職種の賃金の決め方が解説され、それが、採掘現場ごとに労働組合の委員との調整の上で決定された標準作業量を基準に仕事の進捗により「総金額」が算出され、その金額が同僚同士の相互評価を反映して各人に分配される精巧かつ柔軟な賃金システムであったと評価されている。第9章「炭鉱町から地方都市へ」(新藤慶)では、炭鉱を取り巻いた芦別市の産業構造と人口の社会移動の推移を分析し、鉱業から「医療・福祉」に牽引されたサービス業へと産業の中心が移動したこと、製造業を含めて女性労働力の拡大がこうした変化を下支えしたことなどが明らかにされる。同じく新藤慶が執筆した第10章「芦別で働いた人たち」は、『芦別市人名鑑』を使って、地域で炭鉱労働者の生活を支えた職業の人々の出身地と従事

産業・職業との関連とその動向を分析している。第11章「芦別の女性たちの組織活動」(西城戸誠)では、炭鉱主婦会の他、芦別市の様々な女性団体の活動が紹介され、生活や政治的指向性が異なる女性たちの間で「対話によって問題を解決する文化」が育まれたことの重要性が説かれる。終章「炭鉱は芦別に何を残したのか」(西城戸誠)は芦別から消えつつある炭鉱の記憶を共有化する実践の重要性が説かれる。

産炭地研究会の炭鉱研究の特徴の一つは、周辺の地域社会を含めて、炭鉱をコミュニティとして把握し、その構成員たちを結びつける「縁」と「つながり」を重視する点にある。それは、尺別炭砒の研究で特に顕著であるが、本書でも随所で「炭鉱社会」の形成が論じられ、その考察範囲が子供・家族から地域社会にまで拡張され、さらに、その「つながり」が離職後に移住した人々の間でも維持されている様子が描かれている。一方で、その内部に厳存した格差にも目配りされている。こうしたコミュニティとしての炭鉱像は、厚い蓄積を持つ炭鉱研究において受容されてきたとはいえ、それゆえ、炭鉱の一般的イメージを変える可能性を持つ。

紹介者が炭鉱労働の研究に取り組んでいた30～40年前は日本の石炭産業が終焉を迎えた時期で、炭鉱研究はほとんど関心を持たれないテーマであった。今は、人口の減少と産業競争力の低下による経済の衰退により、日本社会の存続可能性さえ取りざたされる状況にある。同会によれば、衰退・終焉した炭鉱の経験は、日本の今後にとって様々な示唆を与えるものだという。すでに日本から消えてしまった炭鉱の経験を共有財産とする同会の研究活動に敬意を表したい。(嶋崎尚子・西城戸誠・長谷山隆博編著『芦別——炭鉱<ヤマ>とマチの社会史』寿郎社、2023年12月、336頁、定価4,000円+税)

(いちはら・ひろし 獨協大学経済学部教授)